

M.И.トゥガン-バラノーフスキーと Rudolf Hilferding

黒滝 正昭（宮城学院女子大学・名）

I

2010 年は『金融資本論』100 年、2011 年は Rudolf Hilferding 没後 70 年である。一 Hilferding 学徒として、この機会に、『金融資本論』の源泉の一つとしてのトゥガン-バラノーフスキー“英国恐慌史と恐慌理論”という視角から両者の関連を検討してみたい。

2011 年 2 月 10 日、正に R.Hilferding の 70 年目の祥月命日に、中田常男『金融資本論と恐慌・産業循環』（八朔社）が刊行された。続いて 2011 年 7 月 15 日には『金融資本論』100 周年記念出版として上条 勇『ルドルフ・ヒルファディングー帝国主義論から現代資本主義論へ』（御茶の水書房）、さらに 7 月 30 日には没後 70 年を記念して倉田 稔『ルドルフ・ヒルファディング研究』（成文社）が刊行された。いずれも記念出版にふさわしい力作で、喜ばしい限りである。[なお Hilferding の祥月命日に関しては、黒滝正昭『ルドルフ・ヒルファディングの理論的遺産』（近代文藝社 1995 年 1 月）264 頁参照。]

トゥガンを論ずる前に、先ずはその文献的土台を確実なものにする必要がある。

ロシア語初版：Промышленные Кризисы въ Современной Англии, ихъ Причины и Вліяніе на Народную Жизнь, М. И. Туганъ-Барановскаго. Съ приложеніемъ 12 діаграммъ. С.-Петербургъ. 1894. 『現代イギリスにおける諸産業恐慌, それらの諸原因および民衆の生活への影響』12 図表の付録付き。第 1 編 諸恐慌の歴史 (第 I ~ IX 章); 第 2 編 諸恐慌の理論 (第 I ~ II 章)。以下の諸版と異なり、章題はすべて無し(章番号のみ)。

ロシア語全面改訂第 2 版：М. Туганъ-Барановскій. Промышленные кризисы. Очеркъ изъ соціальной исторіи Англии. 2-е, совершенно переработанное, изданіе. С.-Петербургъ. 1900. 『諸産業恐慌 イギリス社会史の概説』第 1 編 諸恐慌の理論と歴史 (第 I ~ VI 章); 第 2 編 諸恐慌の社会的意義 (第 I ~ IV 章+結論) (репринт, изготовлено WWW. BIBLIARD. RU)

ドイツ語版：Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England. Von Dr. Michael von Tugan-Baranowsky. Mit 2 Figuren im Text und 12 Diagrammen. Jena 1901. 第 1 編 諸恐慌の理論と歴史 (第 I ~ VIII 章); 第 2 編 諸商業恐慌の社会的

諸作用（第Ⅰ～Ⅳ章＋結論的諸考察）。救仁郷 繁訳『新訳 英国恐慌史論』ペリかん社 1972

フランス語版：Crises industrielles en Angleterre par Michel Tougan-Baranowsky. Traduit sur la 2^e Édition Russe revue et augmentée par L'Auteur par Joseph Schapiro. Paris 1913. 第1編 諸恐慌の歴史（第Ⅰ～Ⅴ章）；第2編 諸恐慌の理論（第Ⅰ～Ⅲ章）；第3編 諸産業恐慌の社会的諸影響（第Ⅰ～Ⅴ章）。鍵本 博訳『英国恐慌史論』日本評論社 1931

ロシア語全面改訂第3版：М. И. Туганъ-Барановскій, Периодическіе Промышленные Кризисы. Исторія Английскихъ Кризисовъ. Общая Теорія Кризисовъ. 3-е, совершенно переработанное издание. Съ 18-ю диаграммами въ текстѣ. С.-Петербургъ. 1914. 『周期的諸産業恐慌 イギリス諸恐慌の歴史 諸恐慌の一般理論』本文中に18の図表付き。第1編 諸恐慌の歴史（第Ⅰ～Ⅷ章）；第2編 諸恐慌の理論（第Ⅰ～Ⅵ章）；第3編 諸恐慌の社会的意義（第Ⅰ～Ⅴ章）

ロシア語第4版：М. И. Туган-Барановский, Периодические Промышленные Кризисы. История Английских Кризисов. Общая Теория Кризисов. 4-е издание. С18-ю диаграммами в тексте. Петроград—1923—Москва. 『周期的諸産業恐慌 イギリス諸恐慌の歴史 諸恐慌の一般理論』本文中に18の図表付き。第1編 諸恐慌の歴史（第Ⅰ～Ⅷ章）；第2編 諸恐慌の理論（第Ⅰ～Ⅵ章）；第3編 諸恐慌の社会的意義（第Ⅰ～Ⅴ章）

以上がヒルファーディング存命中に刊行された版すべてである。

II

救仁郷は「訳者あとがき」で、「私が知り得た限り」（456頁）ということで次の5種の版を挙げている。（1）ロシア語初版『現代イギリスにおける産業恐慌』ペテルブルク 1894年、（2）ロシア語増補改訂版（第2版）「書名は初版と同じか、ドイツ語版のように改めたのか不明」ペテルブルク 1900年、（3）ドイツ語版『イギリスにおける商業恐慌の理論および歴史の研究』イエナ 1901年、（4）ロシア語増補改訂版（第3版）『イギリスにおける産業恐慌』（？）ペテルブルク 1910年、（5）フランス語訳『イギリスにおける産業恐慌』J・シャピロ訳、パリ（？）1913年。「最後のフランス語訳は、1910年刊のロシア

語増補改訂版を底本とし、それに原著者が若干の補訂を施したようである」（救仁郷訳、456頁。（？）は救仁郷）。

上記（1）に関して：先ず書名が前半部分しか挙げられていない。これは訳者が「各種の辞典」（456頁）での略記書名に拠ったからである。さらに「私の推定では1894年の初版が三篇からなり、1900年増訂版と1901年ドイツ語版は二篇に改められ、1910年増訂版はふたたび三篇構成に戻されているらしい。」（456頁）「独版の二篇構成が、仏訳ではロシア語初版のように三篇構成に戻った」（465頁）と述べられているが、実際には上述Ⅰで見たように、ロシア語初版・第2版、ドイツ語版はいずれも二篇構成である。そして「1910年増訂版」というものは、そもそも存在しない。

上記（2）に関して：「書名は初版と同じか、ドイツ語版のように改めたのか不明」（456頁）と述べられているが、上述のようにどちらでもない新たな書名が付けられている。「増補改訂版」というのも正しくない。正確には「全面改訂版」である。初版は517頁、第2版は339頁であり、「増補」どころか著しく削減されている。

上記（3）に関して：「このドイツ語版は、・・・明らかに著者がみずからドイツ語で書き下ろしたものである。また、ロシア語第2版に基づいて書いたと述べてはいるが、ロシア語版の翻訳だとはいっていない。・・・フランス語版ではシャピロという人による翻訳であることが明記されている」（455-456頁）。著者自らドイツ語で書いたことは間違いないが、内容的には、ほぼロシア語第2版の著者自身による独訳である。従って次の二つの章を除いて、「書き下ろした」とは言えない。

ドイツ語版で文字通り書き下ろしたのは、第Ⅰ篇第Ⅵ章 Die Erklärung der Krisen aus der Unterkonsumtion der Volksmassen と第Ⅰ篇第Ⅶ章 Die Krisentheorie von Marx の二章のみである。これはトゥーガンがドイツの読者に向けてロシア語第2版第Ⅰ篇を二章分増補したものであり、是非述べたかったものであろう。そのためドイツ語版第Ⅰ篇は、章の数が二つ増えている。ドイツ語版第Ⅰ篇最後の第Ⅷ章は、ロシア語第2版第Ⅰ篇最後の第Ⅵ章に当たる。

上記（4）に関して：「増補改訂版」ではなく「全面改訂第3版」は、1910年ではなく実際には1914年に出版され、書名もフランス語版とは異なり『諸産業恐慌 イギリス諸恐慌の歴史 諸恐慌の一般理論』と改められている。

それでは救仁郷は、何故これほど推定を誤ったのか？それは鍵本 博訳「著者序」（1912年11月20日付け）の中に「・・・恐慌は恐らく1914-16年頃に起るであろう。私は2

年前ロシア版の中でこの意見を発表した。」(2頁)という訳文があり、下線部を彼は、1910年にロシア語第3版が出版されたものと解釈したからである(救仁郷訳466頁)。ところがこの「ロシア版」は、鍵本の誤訳である。フランス語版原文は *la presse russe* であり(p.vii)、「ロシアの新聞」の意味である。前掲ロシア語第3版の序文を見ると《Рѣчь》(論点)という新聞であったことが分かる(c.xi)。

上記(5)に関して：仏語版著者序文によれば「ツガンは仏訳を校閲し、若干の補訂を加えたい。最後の方でいっている『二年前ロシア版』という言葉から、1910年の増訂版(初版から数えてロシア語第3版)を私は推定したが、序文の前段では、ロシア版とドイツ版は19世紀の恐慌しか扱っていない、とっており、前段のロシア版というのは、1900年増訂版・・・を指すのか、1910年版を指すのか、分からない。もしこれが同じ内容のものとなれば、1900年版も三篇構成で、1910年版は単にリプリントの増刷であって、ドイツ語版だけが二篇構成ということになる。私自らロシア語版を参照できなかつたし、鍵本訳では仏訳書名が記されているだけで、その仏訳が何年刊のロシア語版を底本にしたものか明記されていないので、この点に疑問が残る。」(救仁郷訳466頁)というふうに、救仁郷は混乱している。

最後の下線部について言えば、これは救仁郷の見落としである。鍵本訳「譯者言」には「原著は『英國に於ける産業恐慌』・・・なる標題の下に 1894年露語で出版されたものであるが、本譯書の底本として使用したものは1913年に出たその佛譯本・・・ *traduit sur la 2e edition russe revue et augmentée par l'auteur, par Joseph Schapiro. 1913* である。」

(1頁)と明記されている。即ちロシア語第2版に著者が改訂を加え、増補した原稿が、シャピロ仏訳の底本なのである。なお救仁郷が出版地を「パリ(?)」としているのは、鍵本が出版地を明記していないからである。

この仏訳本は、ロシア語全面改訂第3版(1914)と編構成は同じであるが、後者の第I篇は三章分増補して八章構成、第II篇は章・節構成を大幅に再編して三章増え、六章構成に変えられている。第III篇は、若干章題の変更はあるが章の数は不変、内容的にも仏訳本と重なっている。従ってシャピロが底本としたものは、トゥガンがこのロシア語第3版を準備していた、中途段階の原稿と言ってよいであろう。

III

さてドイツ語版で増補された二章のうちの一つ、第I篇第七章 *Die Krisentheorie von Marx* に関する Hilferding のコメントを見てみよう。

a)Es ist das Verdienst T u g a n – B a r a n o w s k i s, auf die Bedeutung dieser Untersuchungen [=der Ergebnisse der Marxschen Analyse] für das Krisenproblem in seinen bekannten „Studien zur Theorie und Geschichte der Handelskrisen in England“ hingewiesen zu haben. b) Merkwürdig ist nur, dass es erst eines solchen Hinweises bedurfte. (Rudolf Hilferding, Das Finanzkapital, Wien 1910, S.304)

マルクス『資本論』第2巻の社会的再生産の分析が恐慌論研究、とりわけ恐慌の諸原因の認識にとって不可欠の意義を有することを初めて指摘したのは、トゥガン・バラノフスキーであった。その指摘を Hilferding は、優れた理論的着眼点として高く評価している。他方ドイツのマルクス主義経済学者たちは、それまでそもそも誰一人としてそのような視点を持てなかった、それは何故か？ということに彼は注目している。

a)Im II. Bande des „Kapitals“ befindet sich die glänzende Analyse der Reproduktion des gesellschaftlichen Kapitals, welche, unseres Erachtens, die Grundlage jeder wissenschaftlichen Theorie des sozialen Stoffwechsels in der kapitalistischen Wirtschaft werden muss. Dennoch ist diese Analyse bei M a r x unvollendet geblieben ; ...Man kann sogar behaupten, dass diese Analyse der M a r x schen Auffassung der Entwicklungsgesetze der kapitalistischen Wirtschaftsordnung in vieler Hinsicht entschieden widerspricht. b)Nur das kann die auffallende Thatsache erklären, dass die genannte Analyse sogar von der M a r x schen Schule so wenig bis heute berücksichtigt ist. Meines Wissens giebt es z.B. in der deutschen nationalökonomischen Literatur keinen Versuch, die Marxsche Analyse der Reproduktion des gesellschaftlichen Kapitals zur Erklärung der Krisen und der Entwicklungsgesetze des Kapitalismus überhaupt zu verwerten. (Michael von Tugan-Baranowsky, Jena 1901, S.199)

このトゥガンの文章を上掲 Hilferding の文章と照合すると、後者は前者に噛み合わせて書かれていることが分かるであろう。とりわけ両引用文の下線部 a)同士、下線部 b)同士の対応関係は明瞭である。

ところでトゥガンは、恐慌論にとって『資本論』第2巻が持つ理論的重要性をいつ認識したのだろうか？ 恐慌の諸理論を扱っているロシア語初版第2編第II章（章題は無い）において、その内容を示す詳細見出しの中に「生産部門の攪乱を恐慌の原因と見る理論（セー、リカードウ、ウィルソン、バジヨット、ジェヴォンズ、エンゲルス、マルクス、カウ

ツキー)」というふうに、トゥガン流に整理されたタイプの恐慌理論家たちが括弧内に列挙されており、その中にマルクスの名前もある（c. IV）。しかし対応する本文で書かれているその内容は、驚くほど中身に乏しい。

「カール・マルクスは、何らか特別な恐慌理論を与えはしなかった。『資本論』で彼が諸恐慌について語っている箇所では、彼はエンゲルスに同調している。即ち資本主義の産業予備軍、過剰労働者軍に関するエンゲルスの学説で、それによれば過剰労働者軍は、順調な何年間かは大小の工場で就業するが、産業的不振の時代には貧乏暮らしや乞食生活をするというもので、この学説は『資本論』の経済学体系の土台の一つとなった」（c. 455）。これが叙述のすべてである！

以上から、1894年段階ではトゥガンは第2編第1章において、『資本論』第2巻第3篇を専ら市場の理論と関連するものとしてのみ扱い（と言ってもマルクスの再生産表式を自己流に修正したモデルを使うと述べているだけで、論史に対するマルクスの**理論的位置づけ**は何も行っていない。c. 408）、恐慌理論との関係は切断されていたことが分かる。市場の理論と恐慌の理論とが何故つながらぬのか不思議であるが、トゥガンがA・スミスの批判的検討を避けてしまったこと、スミスが社会的生産物を可変資本と剰余価値に分割してしまい、不変資本の役割を消滅させてしまったために社会的再生産の問題を理論的に捉えられなかったことの意味を、検討せずに素通りしていることが、両方の理論が繋がらない原因と言えるかもしれない。

『資本論』第3巻ドイツ語原著が出版されたのは1894年、ダニエリソン訳ロシア語版の出版は1896年であるから、第3巻を読んだ後に第2巻と比較して、後者の理論的重要性が恐慌論との関連で一面的と言ってもいいほど鋭く浮き彫りになってきたのではなかろうか。ロシア語初版では欠けていた不変資本、生産手段生産部門の恐慌における役割が、裏返しの非常に鋭く理論的に認識され、その視点から見ると第3巻のマルクスは、それを否定するシスモンディ流の過少消費理論に近いように見えてきたと思われる。

ロシア語第2版（1900）では、各章の内容詳細見出しにはマルクスの名前は出てこないが、第1篇第1章「資本主義経済における諸恐慌の主要な諸原因」においてドイツ語版（1901）と同じ再生産の議論が展開されているので、この段階では、恐慌論にとっての『資本論』第2巻の理論的重要性に関するトゥガン流認識は完成したと言えよう。それを文章化したものが、ドイツ語版で増補された第1篇第6章「大衆の過少消費からの恐慌の説明」と第7章「マルクスの恐慌理論」と言ってよいであろう。（文献探索では宮城学院女

子大学図書館、ロシア語第2版の入手では宮原ラーダさんに大変ご尽力いただいた。))